国際医療福祉大学大学院
乃木坂スクール
～発信力を磨き・想像力を磨いて、医療を変える・福祉を変える

「特別報道という手法」

毎日新聞特別報道グループ
銭場裕司
2015年7月2日青山キャンパス

■本日お話しするテーマ

＜※スライドで表示するすべての写真、記事の2次利用等はお控えください＞

© 毎日新聞社

■問題を知ったきっかけ

身近に行方不明者

2011年6月27日
北九州版

被災地での活動を語る銭場記者（右）と天野さん

被災地での取り組み報告

「心を支え続ける ケアが必要」

課題など意見交換

東日本大震災

東日本大震災の被災地での取り組みや課題についての報告会が26日、戸畑区のウェルとばたであった。認知症の理解を広げる活動をしている「認知症・草の根ネットワーク」（事務局・小倉南区）が「被災地での経験を聞いて何をすべきか考えよう」と企画した。

報告会では、現地を取材した毎日新聞西部本社報道部の銭場裕司記者(36)が、岩手県大船渡市で母や親類を失った男性が地域住民たちに精神的に支えられた事例を紹介。「今回の災害は地域の絆の大切さを教えてくれた」と話した。

北九州市障害福祉センター職員で、宮城県気仙沼市で心のケアにあたった天野鳳治さん(41)は「避難所で乱立している男性の怒りが気になった」と振り返り、長期的なケアの必要性などを訴えた。

その後、同ネットワーク会員ら約30人と、被災地の課題などについて意見交換した。

広石眼科
平和通モノレール駅前山口銀行ウラ
TEL 521-0517 駐車場完備
白内障日帰り手術 緑内障・網膜硝子体手術
院長 廣石 啓朗（日本眼科学会眼科専門医）

■行方不明問題から身元不明問題へ
・連載「認知症　姿消す高齢者」
・「全国に太郎さん、花子さん」

2013年3月24日
朝刊１面(西部
本社発行紙面)

誰もが当事者に

認知症 姿消す高齢者 ①

全国に患者300万人超

午前8時半、食卓に鯛と黄色の夫婦茶碗が並ぶ。「ご飯食べようね」。北九州市小倉南区葛原の田中澄江さん(68)が自宅の食卓で声をかけた。だが、夫紀行さん(73)はいない。行方が分からなくなった認知症の紀行さんの帰りを待つ日々は今年5月2日で丸2年になる。

その日、紀行さんは最近過ぎに普段通り散歩に出かけた。いつもは30分程度で戻るのに、そのまま帰ってこなかった。

澄江さんや家族らは必死に捜した。警察に届け出て、情報があれば駆けつけた。自宅から約17キロ離れた同市若松区の住宅街や、約14キロある福岡県行橋市の商店街。スーパーで終日張り込んだり、北九州市内を流れる紫川を上流から河口まで歩いたこともある。

情報が寄せられた10カ所には、警察犬も出動した。だが、においが残っていたのは自宅から約500メートル離れた公園の近くまで。所持金はないはずだが、車に乗った可能性も考え、警察を通してタクシー会社にも照会した。手は尽くしたが、いまだに行方は分からない。

高度経済成長期の1969年、紀行さんと結婚した。3人の娘に恵まれた。大手電機メーカーの関理会社で長年勤めた「仕事一筋の企業戦士」だった紀行さんに異変が現れたのは6年ほど前。妹と娘の名前を混同し、5000円の買い物に1000円札を何枚も出した。

だが、思うように言葉が出なくなっても、夫婦の穏やかな生活は崩れなかった。紀行さんの優しさは変わらなかったから。庭でもいだミカンやモミジの葉を丁寧に食卓に並べる紀行さん。「きれいやねえ」。澄江さんのまぶたには、褒め言葉ににっこり笑う紀行さんの姿が焼きついている。

「早く連れて帰ってあげたい。自分だけがご飯を食べてお風呂に入って良いのか」。澄江さんの目から涙があふれる。半生の頃から2人を知る介護施設職員の重留正弘さん(72)は「家族が認知症を受け止められず、ぎくしゃくする家は多い。認知症になった後も2人は理想の夫婦だったのに」と悔やむ。

認知症発症後、紀行さんが道に迷うことはなく、家を飛び出したこともない。行方不明になる予兆はなかった。澄江さんは訴える。「自分の家族はまだ大丈夫と思わないでください。同じ思いをする人は二度と出てほしくない」

◇

警察庁のまとめでは、04年の1年間に認知症などによる徘徊のために行方不明になった人の捜索願などは全国で2万3668件。このうち548人が死亡し、同年末までに見つからなかった行方不明者は357人に上る。全国で300万人を超え「ありふれた病気」になった認知症。25年には介護が必要な認知症高齢者が約1・5倍の470万人に増えると推計される。誰もが当事者になりうる行方不明の現場を取材した。　＝つづく

(次回から社会面掲載)

新聞にラインを引くことが日課だった田中紀行さん(家族提供)。身長160センチで細身。行方不明時は灰色ジャージー上下姿で、紺色キャップをかぶり、赤いランニングシューズをはいていた。情報提供は福岡県警小倉南署(093・923・0110)へ。

■行方不明者

　どこかに行ってしまい、行き先が分からなくなっている人

■身元不明者

　路上などで保護されたのに、名前や住所が分からない人

■「太郎さん」「花子さん」を捜して

・各自治体に取材、アンケート
・存在は把握。本人取材の壁
・成年後見人、施設職員の英断

太郎さんと面会

© 毎日新聞社

2012年3月11日　保護

入所当時は･･･

© 毎日新聞社

大阪を捜し歩いて

© 毎日新聞社

■顔写真掲載は？

・本人同意困難

・成年後見人の権限

・医療同意の手法

・本人にとって・・・

「私」知る人どこに

都会の施設に2年 訪れる者なく

老いてさまよう

重い認知症があり2年前に大阪市内で保護された男性が名前や住所が分からず「太郎」という仮の名前が付けられた男性について、記者は本人を知る人がいないか、写真を手に保護された大阪市内の住宅街を捜して歩いた。

【銭場裕司、山田泰蔵】

太郎さんが保護されたのは市中心部からほど近い最寄駅から徒歩5分の場所。付近のスーパーや歩道には同年代の人が多く、居住者や町内会長によると、高齢夫婦や独り暮らしの世帯が点在している。「優しそうなおじいちゃん。早く名前が分かるといいねえ」。場面を説明すると誰もが胸を痛めている様子だったが、身元を知る人はいない。

保護時の洋服からも探った。デザインに特徴がある水色のダウンジャケットは埼玉県にあるメーカーの商品と分かったが、関西では兵庫県尼崎市や大阪府寝屋川市などを主な販売店舗で計3001～500着が販売され、それ以上はたどれなかった。

大阪市内の介護施設で暮らす太郎さんのベッドは4人部屋の窓側。他の入所者には家族の面会もあるが、太郎さんに訪問者はいない。壁には「お誕生日おめでとうございます！ 72歳○○太郎様」と1月に迎えた仮の誕生日を祝う写真付きパネルが飾られている。

太郎さんはホールのソファにいたかと思えば突然思い立ったように歩き出す。食卓の椅子やベッドなどへと、あまり落ち着かない様子だ。

「分からん」「お子さんはどうなったの？」「お子さんは？」「子供はもういない」「いないってどういうこと？」「分からん」といったやり取りも。「コーヒー好きや」と話したこともあった。

だが、最近はこうした言葉を発することが減っている。男性職員は「穏やかだが認知症が進んでいる」という。

太郎さんが訪れた今月上旬。「帰、行こか？」。女性職員に散歩に誘われた太郎さんは「行く」と応えた。転倒に備えて職員が胸に手を添える。記者が「デートみたいですね」と声をかけると太郎さんはほほ笑んだ。ピンク色に染まる公園を歩いて椅子に腰掛けると、心地よさそうな表情を浮かべた。

太郎さんは食べることが大好きで、箸を使って食事を取ることもできる。桜の下を歩いた後はチキン南蛮のランチを満足そうにたいらげた。だが、こうした生活がいつまでできるかは分からない。

過去を取り戻すことで必ず幸せになるとは限らないが、「このまま最期を迎えるのは忍びない。名前やルーツを取り戻してほしい」。太郎さんを支える人たちの共通の願いだ。

介護職員とともに桜並木の下を散歩する太郎さん。上着のダウンジャケットは、保護された際に着ていたもの＝大阪市内で、梅田麻衣子撮影

毎日新聞は成年後見人らと話し合い、身元が分からないこの男性について情報提供を呼び掛けます。プライバシーに関わることは一部伏せていますが、保護時に着ていたトレーナーの写真などを毎日新聞ニュースサイトに掲載します。情報の宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞特別報道グループ、ファクスは03・3212・2813、電子メールはtokuhou@mainichi.co.jp。記事へのご意見やご感想もお寄せください。

仮名2年 認知症男性

身元不明のまま

2年前に大阪市の路上で倒れ保護されたが、名前や住所など身元が全く不明のまま、仮の名前が付けられ介護施設で暮らす重い認知症の男性がいることが分かった。男性は自分の名前が分からず、該当する行方不明者届もない。専門家は「高齢化が進み、今後このような人が増えていくのでは」と危惧している。

（社会面に関連記事）

大阪市は男性に対し、保護された場所にちなんだ名字に「太郎」という仮の呼名を付けた。翌年の保護を受ける手続きなどで必要なためだ。容姿などから70歳と推定して仮の生年月日も決めた。現在推定73歳になったが、入所する同市内の介護施設の職員には「実際はもう少し若いかもしれない」との見方もある。

配者は4月上旬、介護施設を訪ねた。「お元気ですか」と声をかけると、太郎さんは「ああ」とうなずき笑顔を見せた。判断能力が不十分な人を守る成年後見人に、市長申し立てで選任された山内鉄夫司法書士らによると、太郎さんの要介護度は3。言葉を発するのが難しくトイレも介助が必要だが、寝たきりではなく夫でひとりで歩くことができる。

2012年3月11日午前8時前。日曜の朝だった。同市西部に位置する住宅街の歩道でしゃがんでいたところを巡回警察に保護された。水色のダウンジャケットにグレーのスエットズボン、黒の運動靴。身なりに汚れはなかった。お金や市税証はなく、名前を尋ねても「分からん」と答えた。

保護された際にはズボンの下に介護用の紙パンツをはいており、保護前に介護を受けていた可能性がある。介護施設の職員も「介護なしで生活ができるレベルではなかった」と話す。

その日のうちに大阪市による緊急一時保護の手続きが取られ、太郎さんは市内の保護施設に入所した。規定の保護期間（14日間）を過ぎても身元が分からず、同年3月末から現在の介護施設に入った。

介護施設は通帳、本人の経歴や病歴、家族構成などを聴まえてケアにあたる。例えば夕方に歩き回る人がいれば「子供のタ食を作るため家に帰ろうとしているのか」と理由を推測し、不安を取り除くよう努める。だが、太郎さんには保護前の情報がない。山内さんによると、30ほどの施設が入所を断り、受け入れ先は容易に見つからなかった。

太郎さんは特殊なケースなのか。認知症介護研究・研修東京センターの永田久美子研究部長は「超高齢社会では人ごとでなく、同様のケースが身近で増えることは確実だ。これまでも太郎さんのような存在と対面しているが、実態把握も対応も進んでいない。一刻も早く本名を取り戻し家に戻れるように、国や自治体が本格的に対策に乗り出すべき時期だ」と話している。

【銭場裕司、山田泰蔵】

顔写真、ソファでくつろぐ太郎さん＝大阪市内の介護施設で、梅田麻衣子撮影

大阪の路上で保護 届けなく

4月19日付朝刊1面（右）、社会面

★兵庫県の74歳と判明

★捜し続けた妻と再会

4月28日朝刊1面

身元判明 家族と再会

仮名2年の認知症男性

兵庫県警 照合ミスか

2年前に大阪市の路上で警察に保護された重い認知症の男性が、氏名や住所などが不明のまま仮の名前を付けられ介護施設で暮らしていた問題で、男性の身元が27日、兵庫県の74歳と分かった。家族と対面を果たしたが、家族により兵庫県警に行方不明者届が出されていたことも判明。見つかった氏名不明者との照合作業で何らかのミスがあり、長期間身元が判明しなかった可能性があるとして兵庫県警は調査を始めた。（社会面に関連記事）

男性は2012年3月11日朝、大阪市内の住宅街で保護され、認知症で氏名や住所を話せず、市は保護された場所にちなんだ名字に「太郎」という仮の名前を付け、年齢を70歳（当時）と推定して仮の生年月日も設けた。

毎日新聞が4月19日朝刊で男性の存在を報じて身元判明につながる情報提供を求め、同日夜にはNHKもニュースで放送。家族はこうした報道で男性が保護されていることを知り、自治体や警察に申し出た。

27日は、警察の立ち会いの下、男性の成年後見人を務める山内鉄夫司法書士が家族と面会し、家族が持参した写真などから本人に間違いないことを確認した。今後については山内後見人と家族が話し合い、男性の体調などを見極めながら方針を決めるという。

兵庫県警によると、男性は12年3月8日午後7時25分ごろ、県内の路上で一緒にいた家族が目を離したすきに行方不明になった。家族は同8時15分ごろ、最寄りの警察署に届け出た。警察署は消防や福祉施設、タクシー会社などにファクスで行方不明者の情報を送り発見の協力を求める「SOSネットワーク」も使って捜したが見つからなかった。

身元が判明し、家族と対面する男性（左）＝大阪市内の介護施設で27日、成年後見人の山内鉄夫さん撮影

大阪府警が男性を保護したのは3日後。最初に行方不明になった場所から数キロしか離れていない場所だった。府警によると、保護した人の名前が分からない場合は通常、全国の警察本部に写真を添付した「迷い人照会書」を送り、該当する行方不明者届がないか確認を依頼する。今回のケースも兵庫県警を含む全国の警察本部に照会したという。

兵庫県警が作成した行方不明者届には家族が提供した男性の写真が添付されていた。

同県警が迷い人照会書と行方不明者届を正しく突き合わせられていればその時点で身元が判明した可能性が高く、何らかの理由でこの照合作業ができていなかったとみられる。

【銭場裕司、山田泰蔵】

発見に一層努力

兵庫県警の福本明彦生活安全企画課長のコメント

本日まで行方不明者をご家族のもとに届けすることができなかったことは残念であり、今後、より一層、行方不明手配・発見業務に努めてまいります。

■なぜ行方不明に

・保護３日前

・救急搬送

・名札

© 毎日新聞社

■再会をはばんだもの

・フルネームが分からなければ・・・

・照合システムの弱さ

仮名２年男性 身元判明

「おとうちゃん 間違いない」

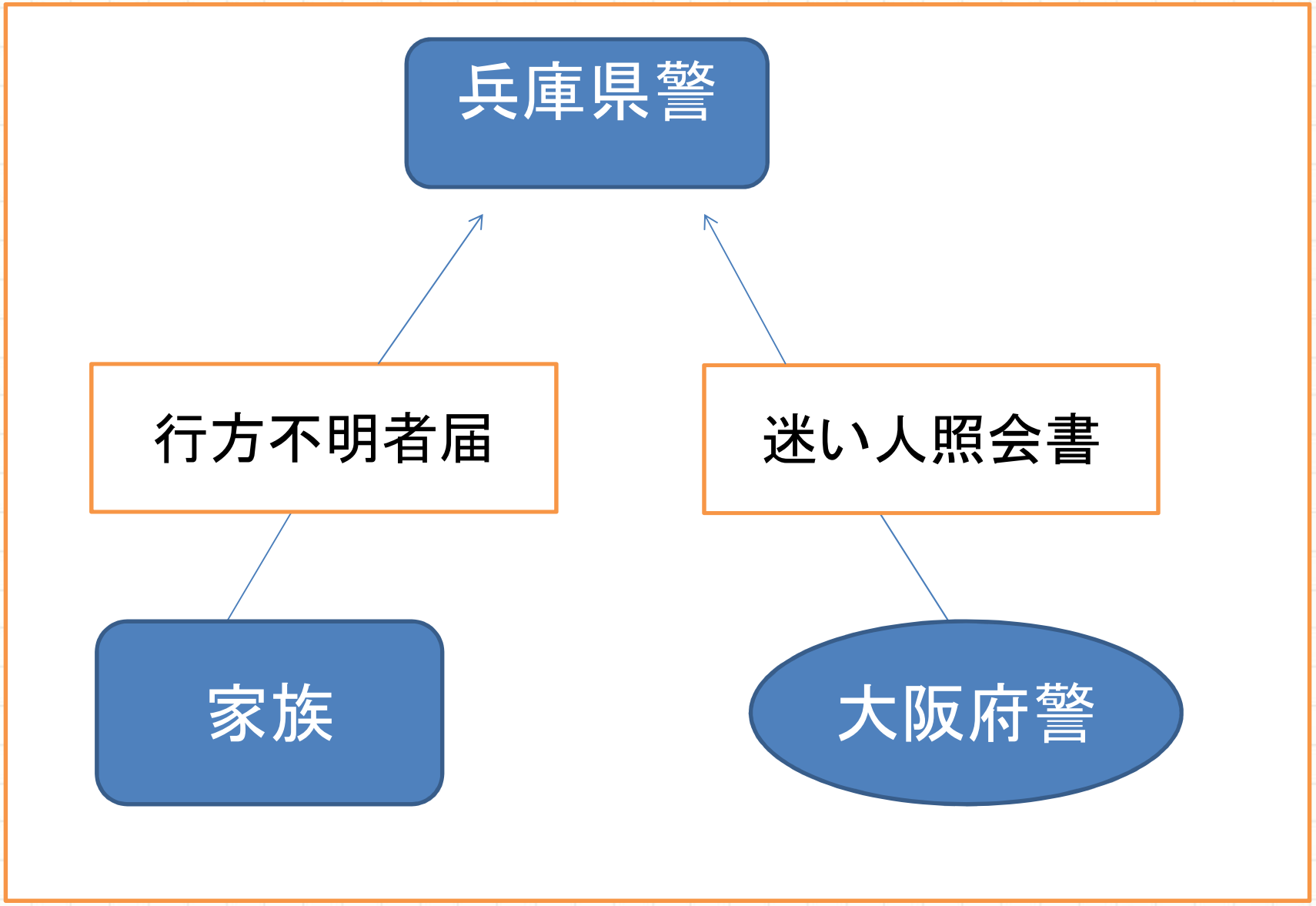
家族 会えると信じ

身元照合 手作業頼み

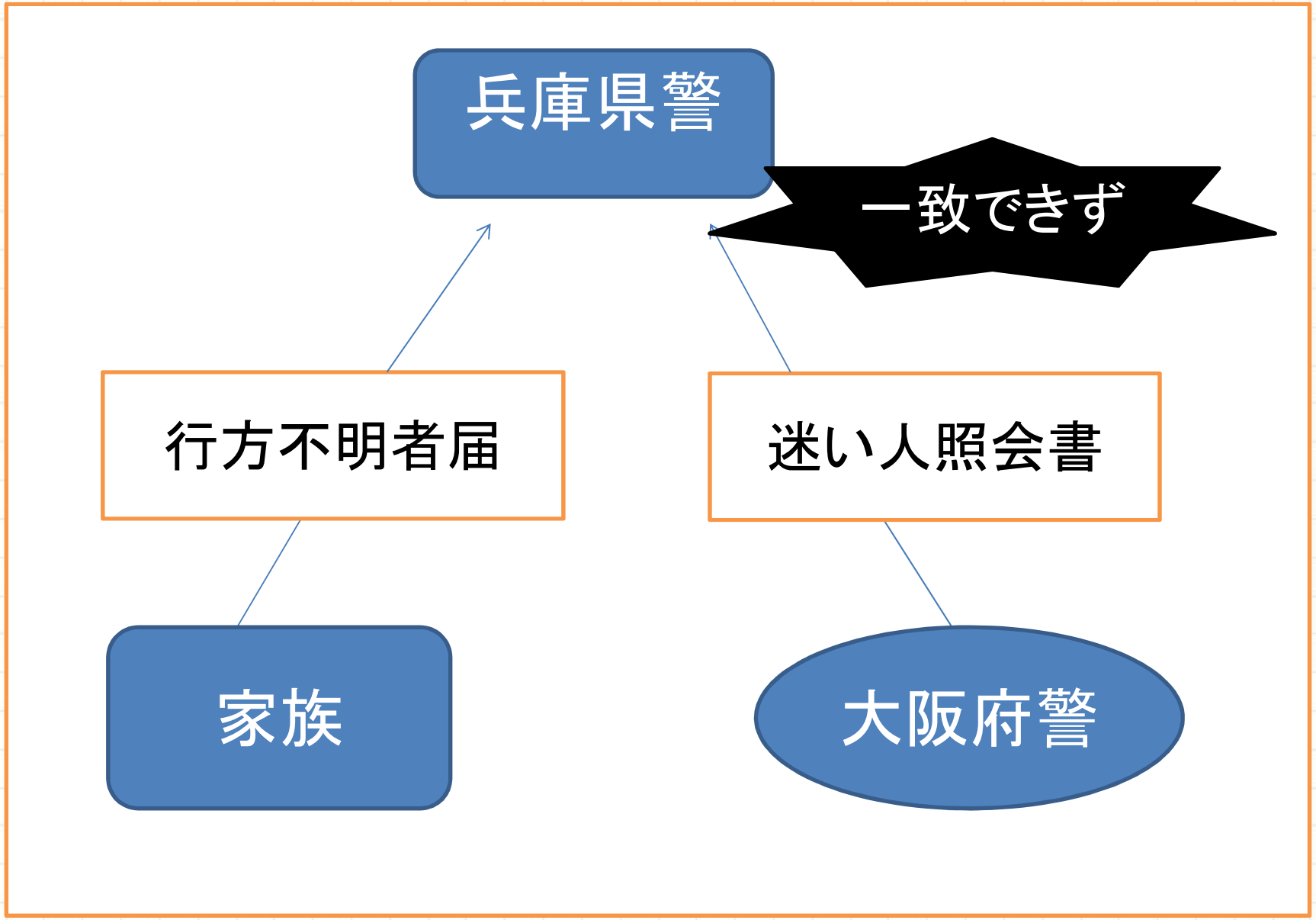
老いてさまよう

2014年4月27日朝刊社会面

■再会をはばんだもの



■再会をはばんだもの



■再会後は

・本当の誕生日

・世間の受け止め

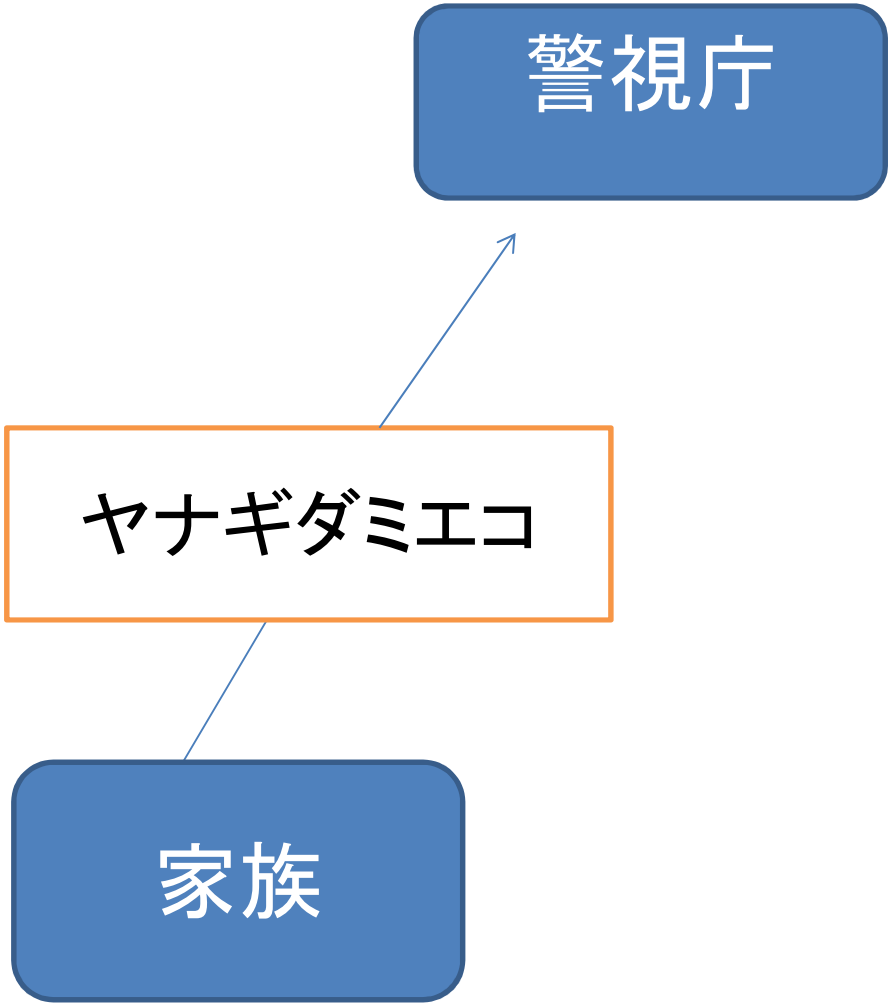
・妻の思い

© 毎日新聞社

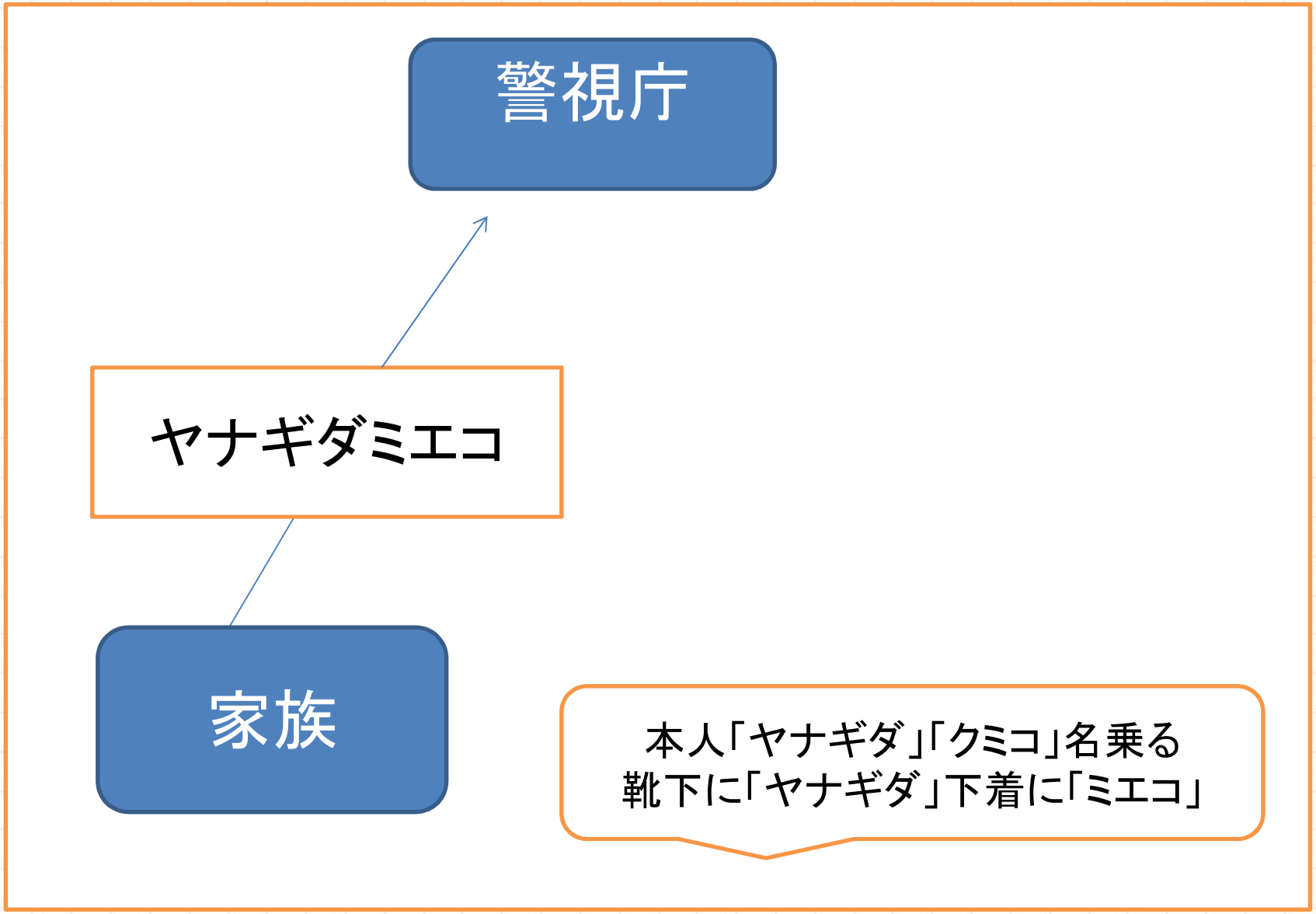
■相次ぐ身元判明①

・群馬県館林市
約7年前保護の女性
ヤナギダ　＝　靴下
ミエコ　　＝　下着

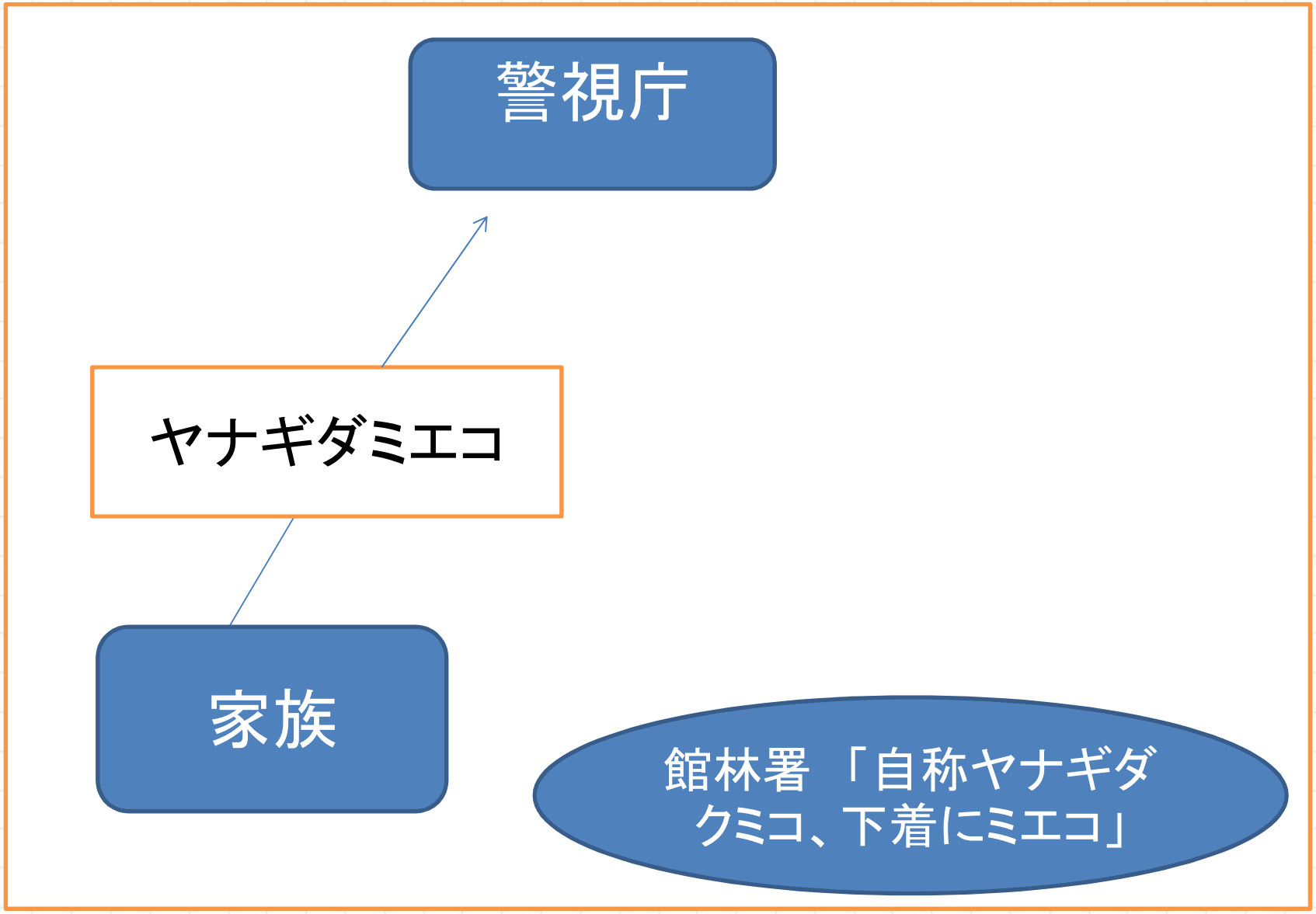
■再会をはばんだもの



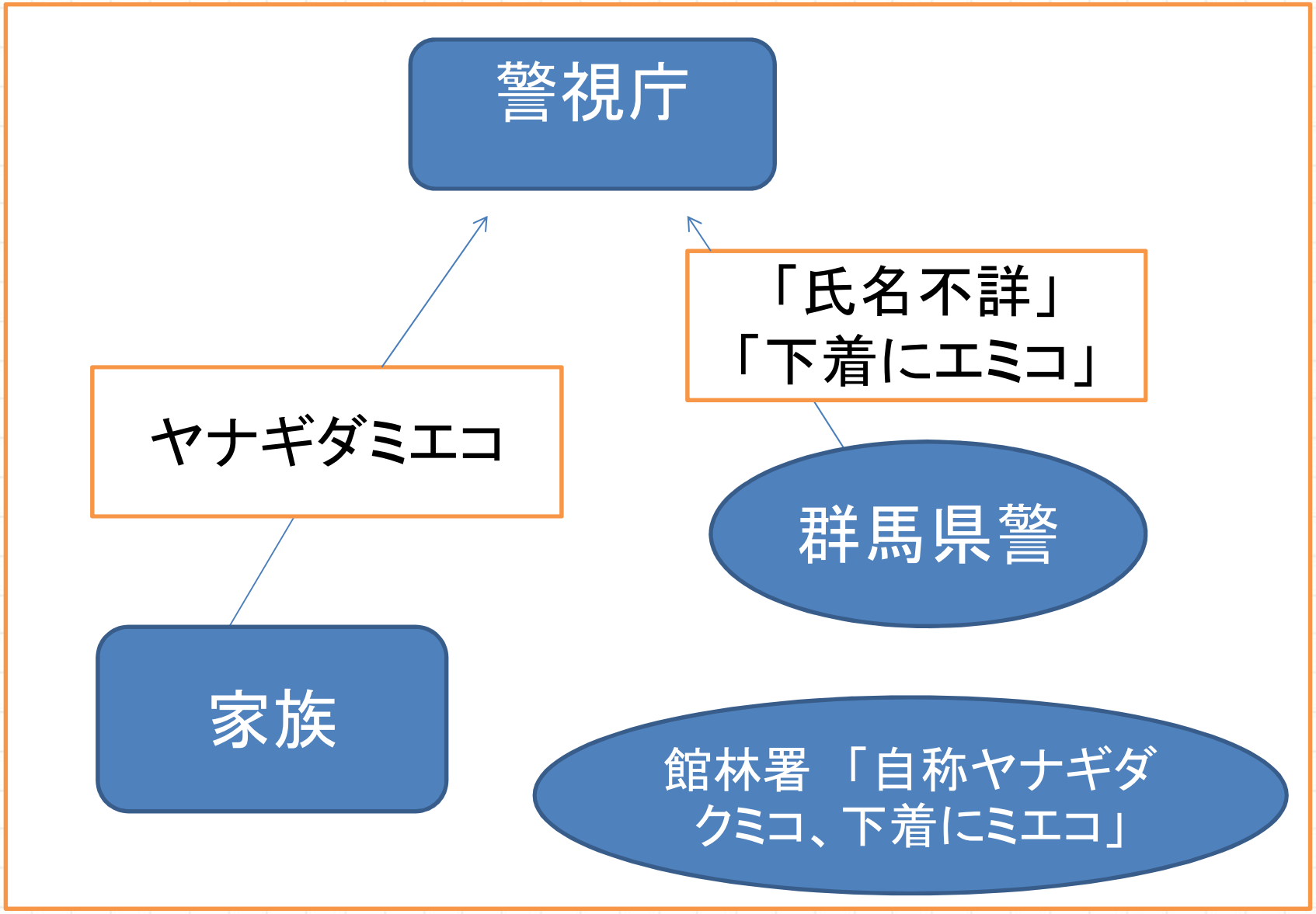
■再会をはばんだもの



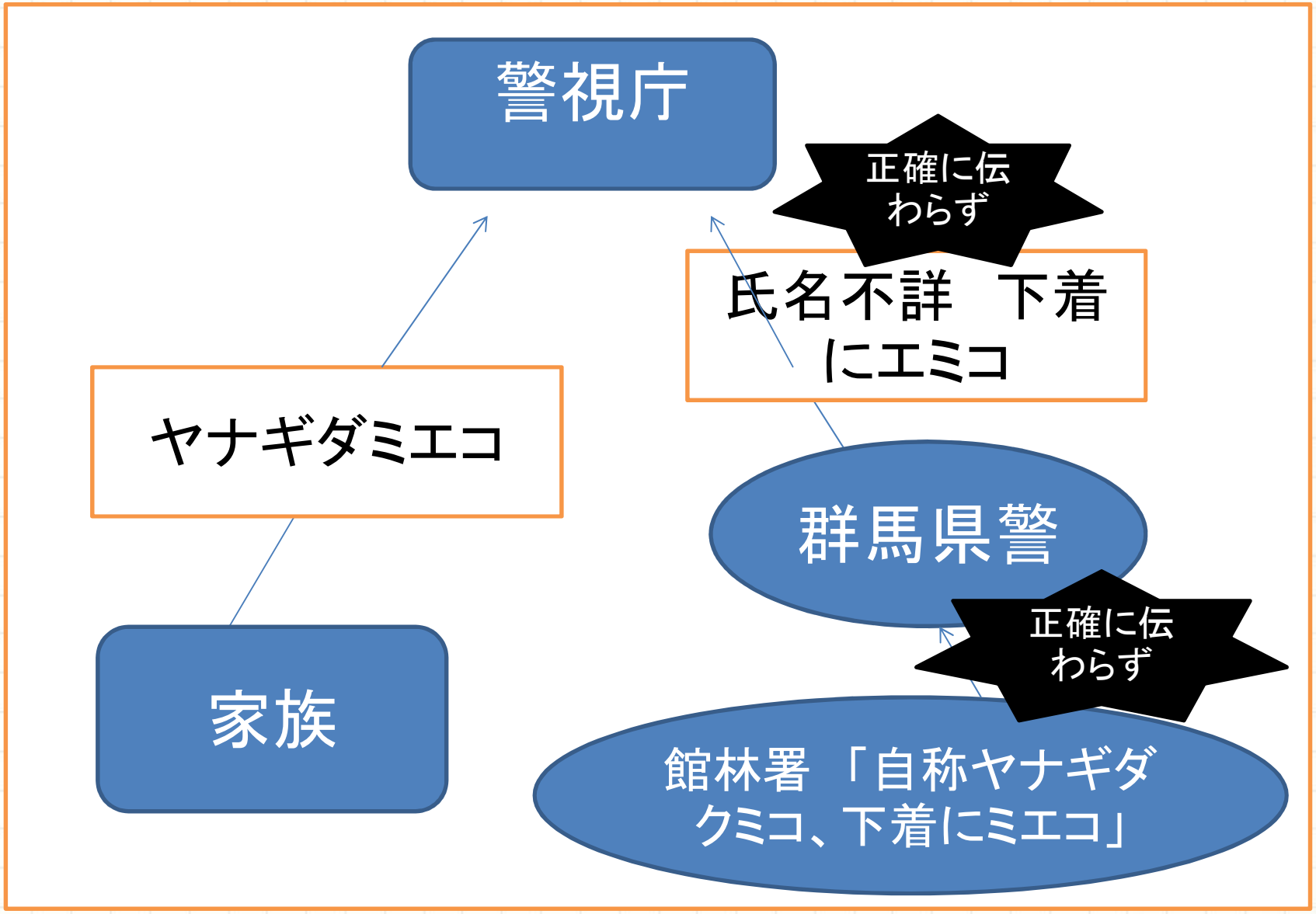
■再会をはばんだもの



■再会をはばんだもの



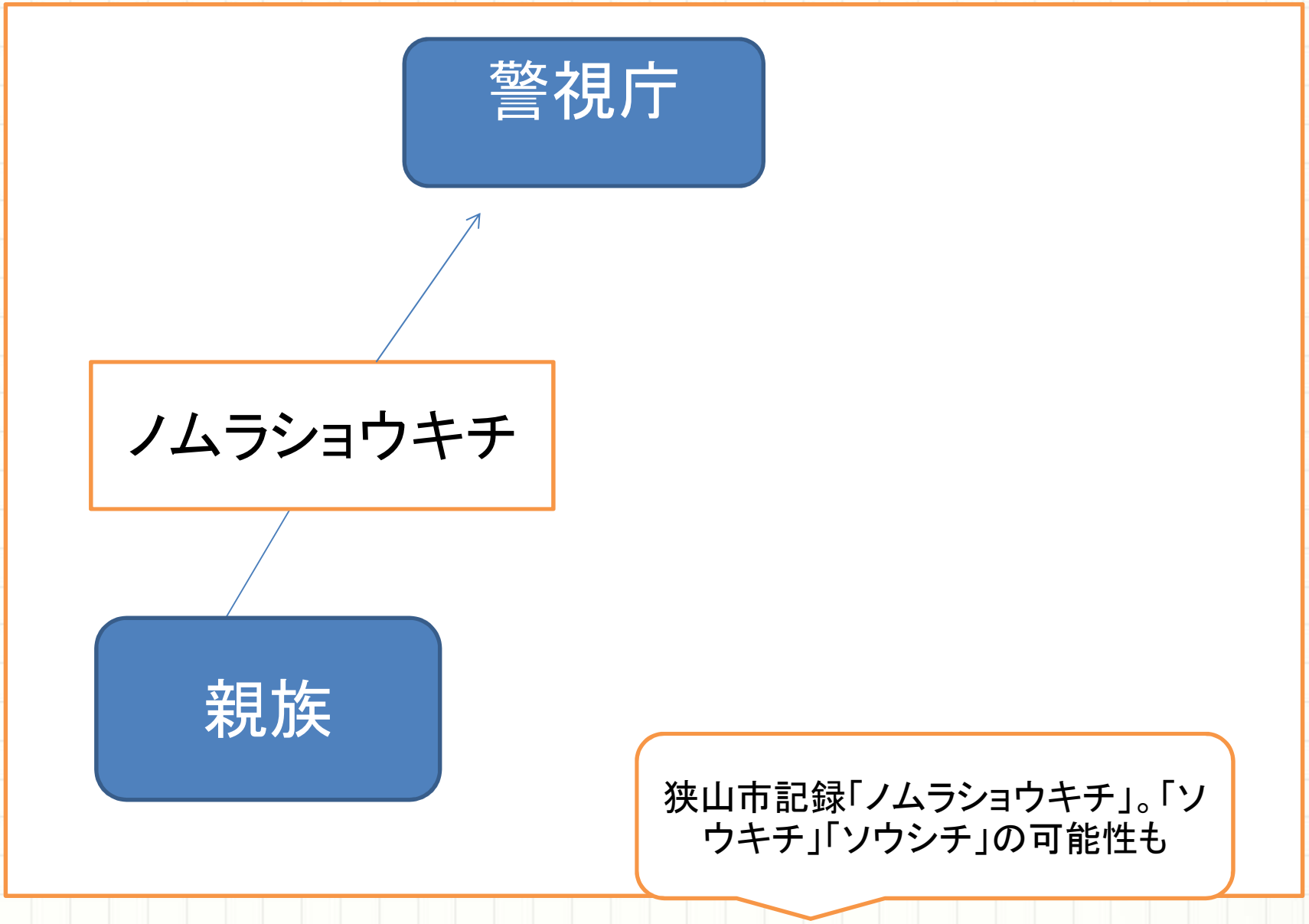
■再会をはばんだもの


警視庁
正確に伝わらず
氏名不詳　下着にエミコ
ヤナギダミエコ
群馬県警
正確に伝わらず
家族
館林署 「自称ヤナギダクミコ、下着にミエコ」

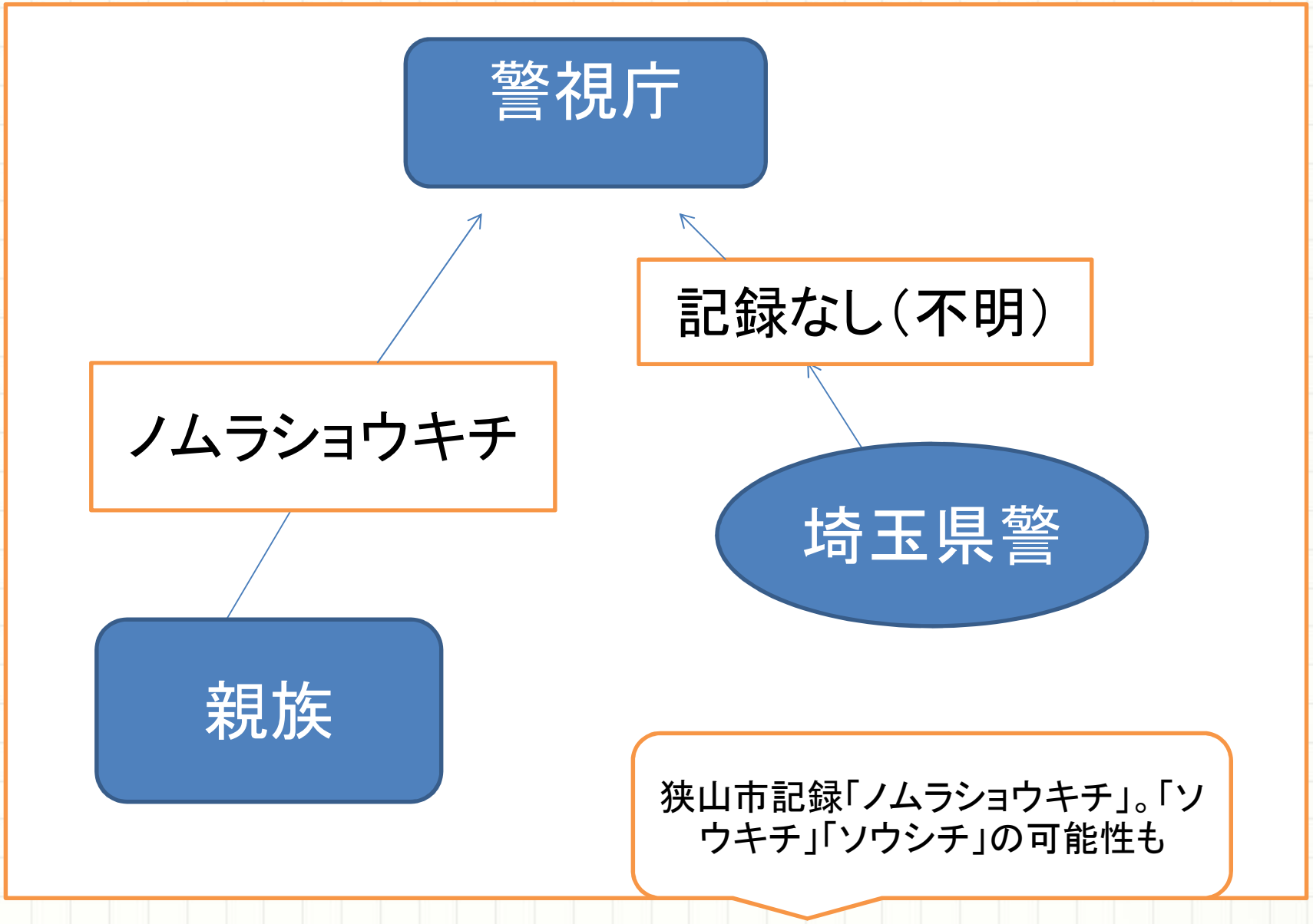
■相次ぐ身元判明②

・埼玉県狭山市
　約18年前保護の男性
　「ノムラショウキチ」

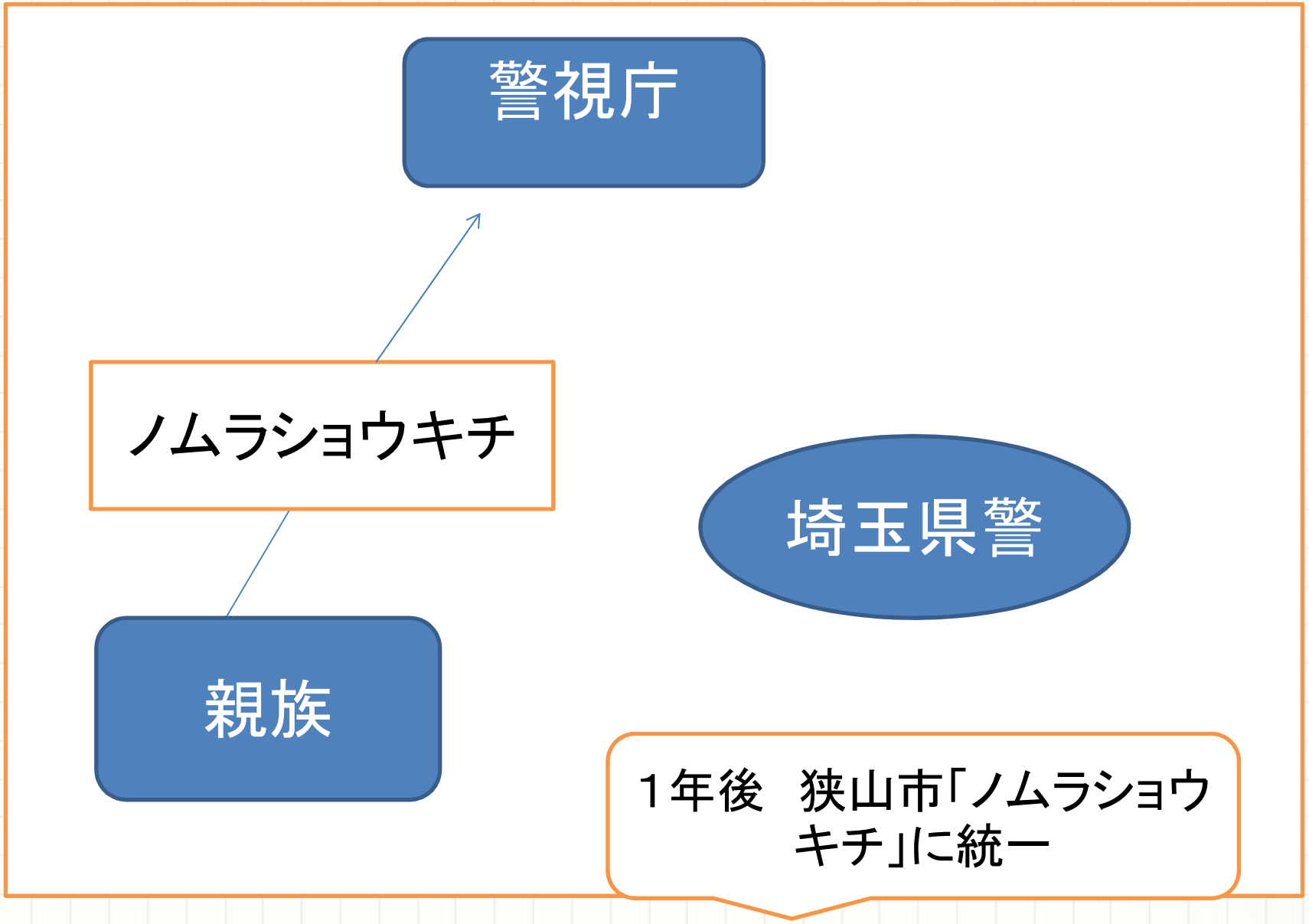
■再会をはばんだもの



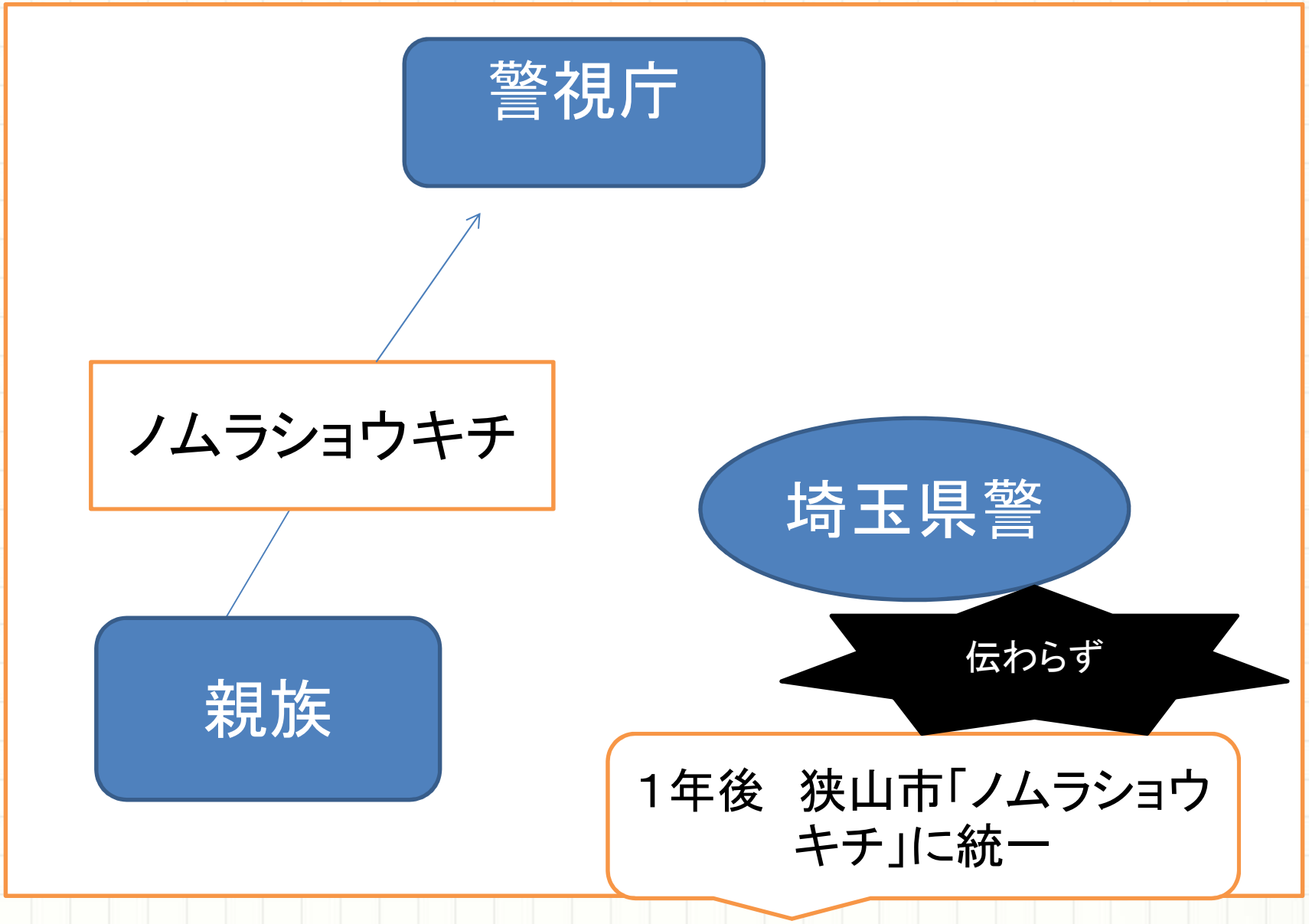
■再会をはばんだもの



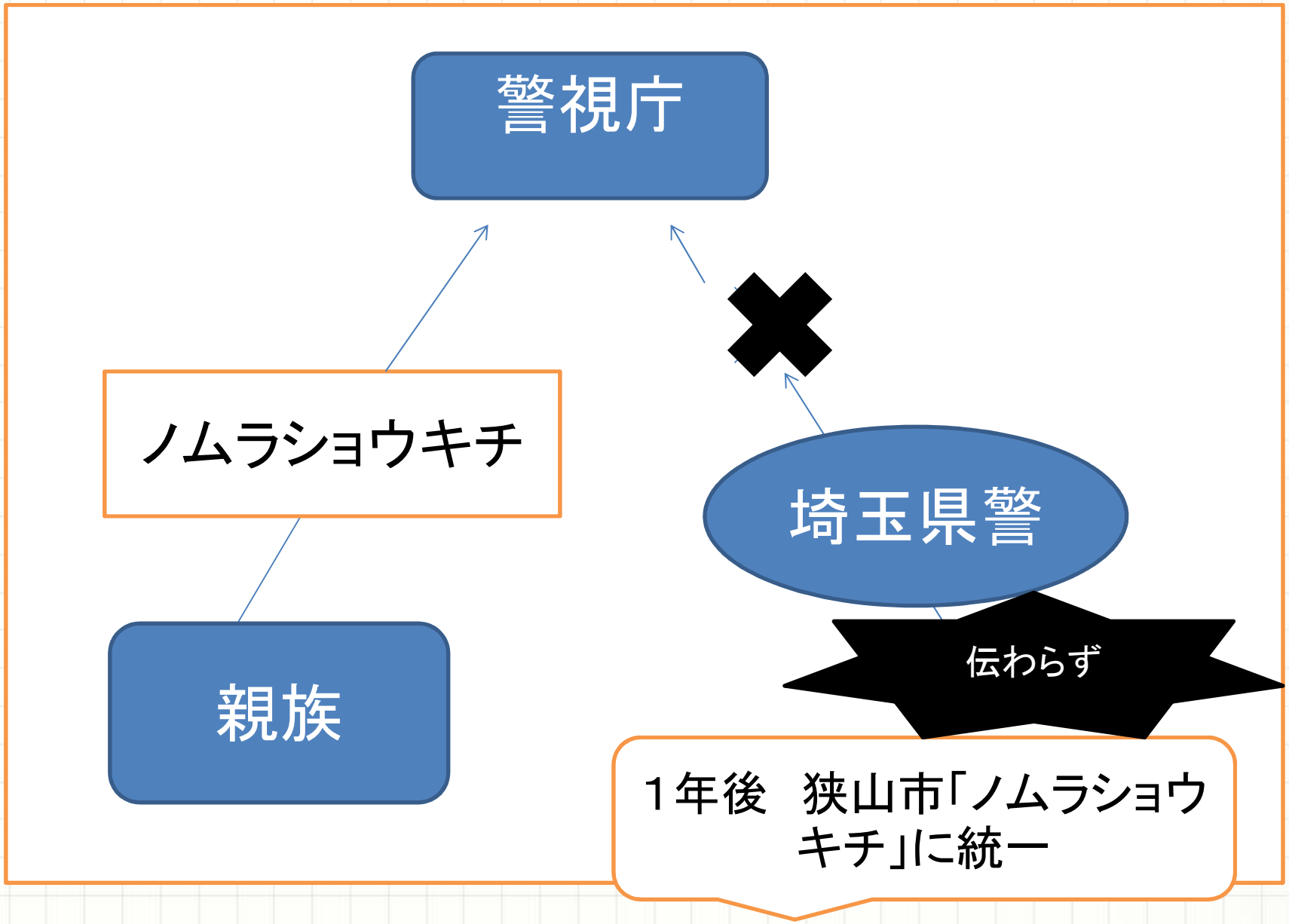
■再会をはばんだもの



■再会をはばんだもの



■再会をはばんだもの



■取材で見えた問題

・衣服に名前があっても・・・

・検索システム不備

・縦割り　連携不足

クローズアップ 2014

進む高齢化 遅れる意識

身元不明なぜ続く

警察 照合でミス

自治体との連携弱く

迷ったお年寄り見たら？

ゆっくり穏やかに声掛けて

体調問題なければ110番を

2014年6月15日朝刊3面

■保護、身元捜しの責任は？

警察

（24時間超）自治体

■警察庁が全国通達

・捜査用システム活用

・自治体との連携強化

2014年6月5日夕刊1面

認知症不明者の確認強化

警察庁通達 照会項目増やし

認知症が原因で行方不明になる人が相次いでいる問題で、警察庁は5日、捜査の現場で活用されている身元確認照会システムを状況に応じて使うことや自治体との連携強化を求める通達を各都道府県警に出した。警察庁が認知症に特化した総合的な通達を出すのは初めて。2013年に警察で保護して自治体に引き渡した人数は1万7人で、このうち年末時点で13人の身元が判明していないことも明らかにした。（社会面に関連記事）

昨年の自治体引き渡し1万人 13人身元判明せず

警察庁によると、13年に認知症で行方不明になった人数は1万3524人で、前年より7・1%（1・4倍）増加した。認知症のため、保護されても名前が分からず身元が判明しないケースもあり、関係者から対応の限界を求める声が上がっていた。

通達によると、全国の警察をつなぐ従来の行方不明者照会システムでも身元が判明しない場合、捜査現場で身元不明遺体の照合用に使われている身元確認照会システムを活用することを求めた。着衣や写真資料など入力項目が15から28に増えるため、名前が分からなくても身元が判明する可能性が高まるとみられる。

各警察本部が責任をもって身元確認を行うよう求めた。また、警察による保護期間（24時間）以降も、行方不明者の引き継ぎ先の市町村と連絡を取ることを改めて求めた。保護している市町村側が希望した場合、顔写真などを添えた捜索用資料も警察本部などに届け出る。

警察庁によると、行方不明者の届け出があった人数は3464人（死亡388人）だった。全体の97・7%は1週間以内に確認されたが、32人は2年以上かかっていた。

2013年に認知症で行方不明になったとして各警察本部に届け出があった人数（警察庁調べ）

道	230
青森	28
岩手	53
宮城	100
秋田	62
山形	120
福島	168
茨城	364
栃木	135
群馬	184
埼玉	179
千葉	233
東京	308
神奈川	199
新潟	159
富山	197
石川	81
福井	79
山梨	17
長野	129
岐阜	280
静岡	113
愛知	611
三重	128
滋賀	102
京都	411
大阪	2114
兵庫	1308
奈良	187
和歌山	23
鳥取	7
島根	26
岡山	255
広島	259
山口	102
徳島	91
香川	88
愛媛	141
高知	46
福岡	279
佐賀	52
長崎	36
熊本	180
大分	52
宮崎	47
鹿児島	65
沖縄	94
合計	10122

（注）一部は受理手続きの方法が異なっている

認知症の行方不明者を巡る問題は毎日新聞が1月から報じた。2年以上転々と暮らす男性の存在が本紙報道で明らかになり、身元不明者の問題が顕在化していた。【長谷川豊】

■厚生労働省　全国調査

身元不明の人　　346人

このうち認知症の人　　35人

2014年9月20日朝刊1面

認知症保護35人

身元不明のまま施設に

厚労省調査

■残る課題

・過剰な個人情報保護

・行方のわからない認知症高齢者等をお探しの方へ
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000052978.html

■特別報道とは①

・調査報道に専念

・半年住み込み

2012年12月24日朝刊1面「老いてさまよう第1部～鳥かごの家から」

高齢者囲い込み

老いてさまよう ①

鳥かごの家から

介護が必要になった人が行き場を失い、さまよいたどり着く「家」がある。介護事業者が介護報酬をあてこみ、箱詰住宅に集めて囲い込んでいるのだ。各地で増えているが、高齢者施設とみなされないため、法律の制約は少ない。東京郊外のマンションでは互いの交流もない孤独な生活が続き、生きる意欲も奪われていく。鳥かごのような家で何が起きているのか。記者はこの夏から一室を借りて住むことにした。

民間集合住宅 介護報酬目当て

東京・八王子。昨年6月に都内の介護事業者が、不動産会社の管理する古い6階建てマンションの空き室を利用して事業を始めた。今は3階と3階の10室が埋まる。6畳一間に ユニットバス・トイレ付き。設備投資はいらない。家賃も入居者10人がそれぞれ負担する。2階の別の1室を ヘルパーの詰め所にあて、日中は通常女性2人が「訪問介護」を担当する。夕方からは夜勤1人だけになる。

麦わらさん。記者が心の中でそう呼ぶことにした男性が入居したのは7月12日。記者が住む部屋のはす向かいだ。70代に見える。部屋のドアにヘルパーが空き缶をぶら下げた。その意味はほどなくわかる。

翌日、男性がドアを開けて出ると、缶の音が騒がしい2階の中廊下に響く。麦わら帽子を持って外出しようとしている。年配の女性ヘルパーが詰め所から飛び出してきた。

「どこ行くの？」「下」「階段とか危ないからね。ごめんね」

手を引かれ、部屋に連れ戻された。認知症で、徘徊の心配があるようだ。他に9人の入居者がいるため付き添って散歩に行く余裕はないのだろう。ヘルパーも疲れ切っている。

数分後、再び空き缶の音。ヘルパーが立ちふさがる。「ご飯ができるまで休んでて」「もうずっと休んでるよ」「じゃあテレビ見ようよ」「いや」「いいじゃない。みんなそうしてるんだから」

次の日、部屋のドアに風鈴もぶら下げられていた。ドアが開くと空き缶と風鈴の音がする。二重の「警報器」なのだ。

廊下にはパイプいすが一つ置かれた。麦わらさんは多い日で40回以上、廊下に出た。麦わら帽子をかぶって日の当たらない廊下を歩き、いすに座る。入居からひと月近くたったころ、記者は「ここの生活はどうですか」と声をかけた。麦わらさんは「慣れるしかないんだよ」と言った。

記者があいさつしてもやがて反応が少なくなり足元もふらつく。いすに腰掛け、うなだれる姿が気になった。

収入が低く、蓄えも乏しいため有料老人ホームなどに入れない人たちは介護事業者の大事な「顧客」だ。年金や生活保護費で家賃を払い、居続けてもらえれば介護保険で確実な収入を見込める。しかもあくまで入居者の「自宅」。施設のようにヘルパーの設置義務やスプリンクラーの設置義務はない。

火事になったらどうするのか。社員の一人は言う。「考えても仕方がない」

（この連載は山田泰蔵、田中龍士、中西啓介、川辺康広が担当します）

社会面につづく

ドアノブに付けられた風鈴と空き缶。麦わらさんが外出しようとすると、音が鳴ってヘルパーに知らせる＝東京都八王子市で

徘徊恐れ 空き缶の警報器

■特別報道とは②

・「想像力を磨く」
　→素朴な疑問から

・「発信力を磨き・・・
◎◎を変える」
　→事実が持つ力

認知症115人 鉄道事故死

遺族に賠償請求も

05年度から8年間

高齢化社会の課題に

認知症またはその疑いのある人が列車にはねられるなどした鉄道事故が、2011年度までの8年間で少なくとも149件あり、115人が死亡していたことが分かった。事故後、複数の鉄道会社がダイヤの乱れなどで生じた損害を遺族に賠償請求していたことも判明した。当事者に責任能力がないとみられる事故で、どう安全対策を図り、誰が担当について負担すべきか、超高齢社会に新たな課題が浮上している。

（社会面に関連記事）

鉄道事故については会社が国土交通省に届け出て、同省は「運転事故等報告」を作成している。毎日新聞は情報公開請求で得た報告書と各事故の警察発表などから、「認知症」という言葉が介護保険法改正で取り入れられた05年度以降の事例を調べた。当事者が認知症であることを記載していない届け出も多く、件数はさらに膨らむ可能性がある。

事故の多くは認知症による徘徊や、自殺を企図したものとみられる。線路を数日にわたって歩いた人や、道路は立ち入れない鉄橋やトンネルで事故に遭った人もいた。

08年1月に大阪市で当時72歳の女性が死亡した事故では、駅ホームの端にある幅1メートルの鉄柵扉から入り線路に下りた可能性がある。本人がGPS（全地球測位システム）発信器を身につけていた分、間に合わなかった死亡事故もあった。

認知症の人による鉄道事故を巡っては、名古屋地裁判決が昨年8月、「家族が見守りを怠った」という JR東海の主張を退けて約720万円の賠償を遺族に命じた。（遺族側が控訴）「家族会などからは「一瞬の隙なく見守るのは不可能」判決通り責任を負うなら在宅介護はできなくなる」と不安の声が上がっている。

毎日新聞はJR東海の事故を含め、被害者の氏名や所在地が判明した分社10件の事故について、遺族や関係者に話を聞いた。

遺族によると、係争中のJR東海のほか、東武鉄道が2件、近畿日本鉄道と名古屋鉄道が各1件で約16万～137万円を請求していた。約137万円のケースでは会社側が事故で生じた社員の時間外勤務分も振り替えを輸送費などを求めていた。この事故を含む7件は双方の協議で減額されたが、4件とも遺族側が賠償金を支払っている。

他の5件は北海道、東日本、西日本、九州のJR4社と南海電鉄の事故で、いずれも請求なしだった。遺族によると、JR東日本は「認知症と確認できたら請求しない」、西日本は「約130万円の損害が出たが請求ないと伝えた」、JR九州は「そういった伝え方はしていない。事実関係に基づき検討し、請求を見合わせたのは事実」、南海は「遺族は控えたい」とコメントした。JR各社で請求しないケースが目立つ一方、私鉄では「厳格請求」の対応がなくないとみられる。

12年度の鉄道事故死者数は283人、統計上明区分の自殺は63件だった。

【山田豊章、鈴木彩香】

認知症の人の事故と鉄道会社の対応例

発生年月日	鉄道会社	遺族への請求額	線路本数	損害額
<JR>				
07・12・5	東海	720万円	34本	2万7400人
09・9・1	九州	請求なし	6本	1200人
10・1・7	東日本	請求なし	9本	1800人
11・7・1	西日本	請求なし	30本	1万7000人
	北海道	請求なし	37本	1万 500人
<その他>				
05・12・11	名鉄	81万円	12本	5000人
09・11・6	南海	請求なし	34本	8万3000人
11・3・1	東武	18万円	6本	3000人
12・1・8	東武	107万円	12本	2万1000人
13・1・1	近鉄	91万円	33本	1万5000人

※いずれも遺族や関係者への取材による。請求額と能登入員は概数。JR東海の事故は、団体が遺族に賠償金を求めて裁判し係争中

「保険会社に相談を」

日本損害保険協会によると、遺族は「個人賠償責任保険」などと呼ばれる保険で損害に対応できる可能性がある。自動車保険や火災保険の特約として契約され、保険料は年数千円程度。たとえば賠償例が「ボールを蹴った」「飼い犬が人を噛った」などと記載されて、鉄道事故も対象と考えない人もいるとみられる。保険料は年数千円程度。

認知症

厚労省の「認知症の人の意思決定能力が判断力が低下し、日常生活に支障が生じる程度に至った状態」。以前は「痴呆」と呼ばれたが、侮蔑的で誤解を招きやすいとの理由で2004年12月、厚生労働省が行政用語を変更した。12年の患者数は「予備軍」と呼ばれる軽度認知障害の人（約400万人）を含めて約862万人に上ると推計され、高齢者の4人に1人にあたるとみられる。

■まとめ
社会に埋もれている問題を
声を上げられない人の声を

ありがとう
ございました！